

【論文】

宮沢賢治作品における岩頸表象 (一)

— 文語詩「岩頸列」の地学的検証と精神医学的接近 —

Representation of the Volcanic Neck in Kenji Miyazawa's work (2) :

Geological Verification and Psychiatric Approach of the Literary Poem "Gankei-retsu"

* 鈴木 健司

SUZUKI, Kenji

キーワード：宮沢賢治 文語詩 岩頸列 南昌山 毒ヶ森 解離

一 はじめに

盛岡市と花巻市の間に位置し、奥羽山脈の東縁をなす、地元において志和三山と呼ばれる山々がある。海拔八百メートルから九百メートルほどの高さで、北から箱ヶ森、南昌山、東根山である。宮沢賢治が文語詩「岩

頸列」に「西は箱ヶと毒ヶ森、／椀コ、南昌、東根の」と記した山々は、この志和三山と重なっている。ただ、「椀コ」だけは地図上にその名が見えず、どの山が「椀コ」に当たるか、これまでに諸説出されてきたが、本稿ではその問題は扱わない。^(注1) また、これらの山々を

*すずき けんじ

文教大学文学部日本語日本文学科

以下南昌山山塊と呼ぶ。

文語詩「岩頸列」全体を次に示す。

西は箱ヶと毒ヶ森、
椀コ、南昌、東根の、
古き岩頸の一系列に、
水霧あえかのまひるかな。

からくみやここにたどりける、
芝雀は旅をものがたり、
「その小屋掛けのうしろには、
寒げなる山によきによきと、
立ちし」とばかり口つぐみ、
とみにわらふにまぎらして、
渋茶をしげにのみしてふ、
そのことまことうべなれや。

山よほのほのひらめきて、
わびしき雲をふりはらへ、
その雪尾根をかゞやかし、
野面のうれひを燃し了せ

私はかつて、拙著『宮沢賢治文学における地学的想像力―〈心象〉と〈現実〉の谷をわたる―』（蒼丘書林、2011.5、以下、前著と記す）の第七章「岩頸」意識について¹で、文語詩「岩頸列」を取り上げ論じたことがあるが、その後、さらなる現地調査を重ね、地質学的データを得ることができ、作品解釈に関しても、

もう少し踏み込んだ解釈が可能ではないかと考えるに至った。

主な考察点は、第一点として、詩「岩頸列」に記された山々が、宮沢賢治が判断したようにほんとうに岩頸であるのか、地質学的データを提示し検討を加えること。そして第二点は、私が前著で「岩頸」意識

と呼んだ賢治が岩頸を見て体験したであろう視覚変容に関し、その理由付けとして用いた「不思議の国のアリス症候群」を、新たに「解離性意識変容」の視点から考察し直すことである。

二 地質学的調査

二一 先行研究

地質学を専門とする大石雅之は、「宮沢賢治の『岩頸列』のある山地に関する一考察」^(注2)において、これまでの地質学的調査結果を紹介している。それらを見る限り、山体を成す岩種に関し必ずしも定説を見ていないようで、安山岩、デイサイト、流紋岩と各種火山岩の名が挙げられている。本論において考察の対象とするのは、北から箱ヶ森(866m)、赤林山(855m)、毒ヶ森(782m)、ノロキ山(742m)、薬師岳(771m峰)、南昌山(848m)、東根山(928m)の七山で、今後の論の展開上、位置関係を地形図によって示す(図1)。

この地域に関する戦後における先駆的かつ総合的な調査研究として、早川典久・船山裕士・斎藤邦三・北村信による『岩手県地質説明書I』(岩手県、1954)を挙げることができる。副題は「北上山地西縁より脊

梁山地に亘る地域の新第三系の地質」となっている。第7章「紫波稗貫地区」第IV「新时期火山岩類」に次のような記述がある。

本地区に於ける火山岩類は、上述の各層を貫くものとして、湯口村大森山を構成する石英粗面岩・湯本村台山・御所村滝沢山・紫波岩手郡界箱ヶ森・赤林山の安山岩があるが、何れも小規模な岩株状をなして男助層及び湯口層中に貫入している。

所謂新規火成活動の初期噴出物と考へられる石英安山岩類は、葛丸川及び豊沢川上流に約9kmの略円形の地域に分布する外、南昌山・西東根山・高倉山・円森山等に分布する。

早川らは、第四系に起こった新規火成活動が「小規模な岩株状をなして」、新第三系の男助層や湯口層に貫入したと考えていたようだ。そして、新規火成活動はその初期に石英安山岩類を噴出し、それが、本稿との関連でいうなら南昌山を成すとし、その後、安山岩類の噴出時期がおとずれ、箱ヶ森、赤林山を成したと

いうことになる。南昌山の石英安山岩と箱ヶ森、赤林山の安山岩の貫入時期に関しては、本論においては異なる見解を後に記すつもりであり、ここでは、早川らの見解を紹介するにとどめたい。

早川らの定義した新第三系の男助層、湯口層は、その後の地質学の進展により定義変更が行われている。まず、村井貞允の「岩手県栗石盆地東縁部の地質」(「東北大学理科報告、地質学」1960.9)により再定義され、湯口層は榊沢層と矢櫃層と分けられ、男助層も、男助層と下猿田層に区分された。早川らが幕館層と呼んだ男助層の下部にあたる層を、村井は飯岡層とし、この飯岡層の命名はその後定着、使用されているため、私もこれまでの論考において飯岡層の呼び名を用いている。

男助層に関しては、大上和良・松坂裕之・土井宣夫・越谷 信・大口健志「脊梁山地東縁部、盛岡―花巻市西方に分布する中新統の層序について」(「地球科学」44巻5号、1990.6)において再々定義され、下猿田層、男助層、矢櫃層、湯口層は一括して猪去沢層の中に組み込まれ、従来の男助層は、猪去沢層中の男助部層と

呼ばれるようになっていた。したがって、本論においてはこれまで前著で男助層と記していたものを、男助部層と記すこととする。

二―二 岩頸とは

宮沢賢治が文語詩「岩頸列」で記した、箱ヶ森、毒ヶ森、南昌山、東根山の各山に関し、地質学的に岩頸であるのか否かという問題は、地質学会においては大石雅之(前出)が、「賢治の「岩頸列」が本当に岩頸からなるのかどうかについては、おそらく誰も詳しく調査していないと思われる」とした上で、「箱ヶ森などの火山岩の貫入は鮮新世(最後期の中新世?)から前期更新世にわたる時期のいつかということになる。中新統に貫入した火山の火道が浸食に耐え残った、すなわち箱ヶ森などの火山岩は岩頸である、ということについてはおそらく問題はないと思われる」と記している。宮沢賢治研究における先行研究として、宮城一男、亀井茂が専門的立場から言及しているが、岩頸とはどのような地質学的現象かという説明が主で、いわば岩頸であることが前提として考察されており、地

質学的に調査するという検証は行われていない。私は前著において、南昌山に関する実地調査の結果、岩頸と判断できるという見解を示している。

では、宮沢賢治が地質学を学んだ大正初めにおいて、岩頸はどのように紹介されていたのか。加藤碩一がすでに『宮澤賢治地学用語辞典』（愛智出版、2011・6）で詳しく述べているが、明治二九年刊行の横山又次郎著『地質学教科書』（富山房、1936・7）に、「岩頸（第七十二図口）ハ其横断面円形楕円形若クハ不規則形ノ棒状岩ナリ。而テ其直径ハ時ニ甚タ大ナリ」と記述されている。掲載の図を次に示す（図2）。

岩頸に関する文献的な調査は加藤碩一によるものに尽きると思われる。特に、明治三三年に伊木常誠が『地質学雑誌』7巻（110頁）「雑報」欄（1900）に「仙臺太白山は火山岩頸なり」と題し、日本における岩頸の具体例として取り上げられていることを見出した点は貴重である。伊木常誠は当時第二高等学校の教授であつた。

横山又次郎は東京帝国大学理科大学教授で多くの地質学関係の教科書を著している。岩頸に関する横山の

記述を追ってみると、前記『地質学教科書』の後は、岩頸の名称をあまり積極的に用いていないようである。『普通地質学講義』（大正3・7）では岩頸は立項されておらず、「幹（岩幹）」の説明が岩頸に近いと思われる。『地質学攬要』（大正8・7）では「幹（一名頸）」と記し、『自然地質学』（大正11・8）では「頸（岩頸）」と記している。いずれの教科書にも岩頸の具体例は記されておらず、「鐘（岩鐘）」の例として「備中日野山」、「潜鐘」の例として「合衆国ダコタ州マトペク」図を掲載している場合が多い。

宮沢賢治が岩頸を具体的にイメージできたとは推定できる日本の教科書としては、佐藤伝蔵の『岩石地質学』（三星社出版部、大正12・6）まで待たなければならぬ。佐藤伝蔵は東京高等師範学校教授で、地質学・岩石学・鉱物学方面での教科書を著している。『岩石地質学』では「火成岩現出の状態」の一つとして「岩頸」を立項し、次のような説明と二枚の図（図3・4）が付されている。

岩頸とは火山に於ける噴出孔充填したる円壩状の

火成岩塊にして、時には粗鬆なる岩塊の集積するものなることあれども、通常緻密なる岩塊をなし、為に浸蝕作用に後れて突兀たる奇景を形成すること多く、径数百米乃至千米、その平面図は多くは円形又は楕円形を呈し、火山噴出物を伴ふにより岩株と区別すべし。

図3（第五図）は、岩頸の成り立ちを图示したもので、加藤碩一が指摘しているように、イギリスの地質学者ゲーキー（Archibald Geikie）の『Text-Book of Geology』（1903）第IVからの転載である。第六図は、日本における頸岩の例として挙げられたもので、仙台の太白山である。佐藤伝蔵の書では、「本邦に於ける此の種の例は未だ多く研究せられず、唯仙台の西郊に於いて第三紀の凝灰岩を伴ひて孤峰高く聳ゆるを以て著しき太白山は、蓋しこの種の火成岩塊に属すべしと称せられる」と説明されている。日本における岩頸の例があまり研究されていないということから、南昌山をはじめとする「岩頸列」の山々を賢治が岩頸と呼んだのは、賢治自身の発見によるものと判断することができる。

宮沢賢治の岩頸の最初の使用例が大正五年であることを思い合わせれば、大正十二年刊行の『岩石地質学』からの影響というよりは、『岩石地質学』が引用しているゲーキーの『Text-Book of Geology』で直接岩頸について学んだ可能性が高いと推定できるだろう。盛岡高等農林の図書館に『Text-Book of Geology』は所蔵されていた。宮沢賢治が仙台の太白山が岩頸であったことを知っていた可能性も考えられるが、確実なものではない。『岩石地質学』を表した佐藤伝蔵には、多くの版を重ねた『地質学』（初版明治31・11）があるが、岩頸についての記述はなご。

明治三十三年に伊木常誠により岩頸として紹介された太白山（図5）だが、山容が極めて南昌山（図6）と似ており興味深い。また、「第三紀の凝灰岩を伴ひて孤峰高く聳ゆる」という点においても、太白山と南昌山は共通している。太白山は新第三紀の茂庭層、旗立層、綱木層といった凝灰岩層に安山岩質マグマが貫入した結果形成されたもので、南昌山は同じく新第三紀の凝灰岩層である男助部層、矢櫃層に流紋岩質（後述）のマグマが貫入したものである。実際に登ってみると

両山とも中腹まで部分的にはあるが新第三紀の凝灰岩が確認され、マグマが貫入した新第三紀の凝灰岩層内で固化したことの証拠と見ることができるといえる。

太白山の薄片(図7)の偏光顕微鏡下の観察結果を以下に記す。薄片の作成並びに鏡下観察は、(有)考古石材研究所の柴田徹氏に依頼した。

斑晶鉱物としては斜長石(微斑晶・小さな斑晶)のみであり、輝石は認められない。石基部分は長柱状の斜長石でほとんど埋められており、ガラス部分は極めて狭いか認められない。全体としては火山岩の組織と言えるが、石基部分が完晶質に近い状態であることから、典型的な火山岩に比べ冷却速度はゆっくりだったと判断できる。色の着いた粒子は輝石から変質した緑泥石である。

南昌山の薄片観察結果については、後に記す。太白山の安山岩は水平方向の節理(図8)を示しており、垂直方向からの冷却であったことの証拠とされている。

このような水平方向の節理は、登山者にとって階段状になるので歩くには都合がよい。水平方向の節理に加え、長い年月の間に垂直方向のヒビも形成され、サイコロ状の方形に割れている箇所も多い。このような観察を記すのは、毒ヶ森に登った時の経験を思い起こさせるからだ。毒ヶ森も安山岩のマグマ(後述)が新第三紀の凝灰岩層に貫入したのだが、山容が似ているのみでなく、まさにサイコロ状の方形に割れている岩塊が点在している点でも共通している。南昌山では水平方向の節理は特に確認はできていない。

二一三 全岩化学組成分析

宮沢賢治が「岩頸列」として記した山である箱ヶ森、毒ヶ森、南昌山、東根山の四山に、赤林山、ノロキ山、薬師岳の三山を加えた七山を調査対象とした。賢治が「椀コ」と記した在所不明の一角は、北端の箱ヶ森と南端の東根山の間はどこかに在ると考えられるので、調査範囲としては「岩頸列」全体をほぼ押さえていると判断できる。

以下は、七山の各山頂から採取したサンプルを対象

に、全岩化学組成分析を行った結果である(表1)。サンプルの分析は(株) 蒜山地質年代学研究所に依頼した。XRF分析とは蛍光X線分析のことである。

北側の四山、箱ヶ森・赤林山・毒ヶ森・ノロキ山グループは、 SO_2 の重量%が共通して安山岩からデイサイトにかかる中間領域に分布し、おおよそ同系統の岩種とみなすことができる。それに対し、南側の三山、薬師岳・南昌山・東根山グループは、 SiO_2 の重量%がほぼ流紋岩の領域で共通しており、南北に明確に区別されることが分かった。 Fe_2O_3 、 MnO 、 MgO 、 CaO などの重量%もそれぞれ、都城秋穂・久城育夫『岩石学Ⅱ』(共立出版、1975・6)における安山岩、流紋岩の平均的な化学組成の傾向に一致している。

北の四山と南の三山との境にあり隣りあわせとなるノロキ山と薬師岳は、それぞれ一山を成すといった感じではなく、尾根伝いのピークという姿である。縦走登山ルートに連続して並んでいるので、肉眼観察では、両ピークの間には岩種の境界が存在することは予想し難いことであった。

表1 XRF分析による火山岩の全岩化学組成.

試料名	箱ヶ森 866m 山頂	赤林山 855m 山頂	毒ヶ森 782m 山頂	ノロキ山 742m 山頂	薬師 771 m 山頂	南昌山 848 m 山頂付近	東根山 928 m 山頂
SiO_2 (wt.%)	62.81	64.15	63.58	63.15	70.29	72.29	69.29
TiO_2	0.61	0.58	0.58	0.58	0.45	0.43	0.40
Al_2O_3	16.42	15.35	15.39	15.54	14.42	15.71	14.45
Fe_2O_3	7.40	7.70	6.93	7.86	5.87	4.53	4.10
MnO	0.14	0.13	0.10	0.14	0.09	0.08	0.10
MgO	2.71	2.61	2.19	2.26	1.01	0.93	0.93
CaO	6.07	5.82	5.65	5.73	3.70	2.46	3.59
Na_2O	2.95	2.28	3.05	3.07	2.50	2.16	4.08
K_2O	1.36	1.33	1.36	1.28	1.69	1.83	2.20
P_2O_5	0.11	0.08	0.12	0.11	0.06	0.04	0.06
Total	100.58	100.04	98.96	99.72	100.09	100.45	99.21
灼熱減量	1.24	2.07	2.46	0.93	1.14	4.27	1.23

二一四 絶対年代測定

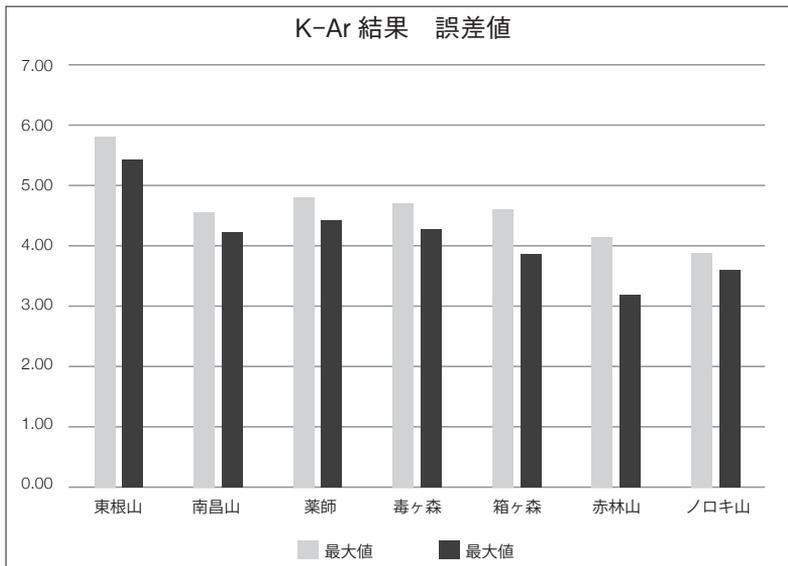
岩石の種類が同じだからと言って、同起源のマグマからなるという証拠にはならない。岩石の絶対年代を調べないことは、その意味で重要な情報となる。絶対年代の測定も（株）蒜山絶対年代研究所に依頼した（表2）。K-Ar年代測定法を用いている。単位は百万年である。絶対年代の古い順に、誤差値を考慮して表にすると、次のようになる（表3）。

赤林山の絶対年代の誤差値が九四万年と幅があるため、明確な区分を提示することはできないが、中間値を用いて考えた場合、おおよそ三段階のマグマの貫入時

表2

試料名	箱ヶ森 866m 山頂	赤林山 855m 山頂	毒ヶ森 782m 山頂	ノロキ山 742m 山頂	薬師 771 m 山頂	南昌山 848 m 山頂付近	東根山 928 m 山頂
K-Ar 結果	4.23 ± 0.38	3.66 ± 0.47	4.49 ± 0.21	3.74 ± 0.14	4.61 ± 0.19	4.39 ± 0.17	5.62 ± 0.19

表3（縦軸の単位は万年）



期を区分できるように思う。まず、約五六〇万年前頃に東根山のマグマの貫入があり、その後四二〇万年〜四六〇万年前ころに毒ヶ森、薬師岳、南昌山、箱ヶ森のマグマの貫入時期、少し遅れて三七〇万年前頃にノロキ山、赤林山のマグマの貫入時期として想定できるのではないだろうか。この区分は、誤差範囲内に収まるものをグループ化しただけで、同一のマグマ起源というものを想定しているわけではない。

ただ、薬師岳と南昌山は岩石の化学組成成分がほぼ同じで、絶対年代（誤差を含む）もほぼ重なるため、同一起源のマグマと言えるようだ。この点に関しては、（株）蒜山地質年代学研究所の八木公史氏のご教示を受けている。山容としては南昌山が独立した山に見え、薬師岳は南昌山に連続した付属的な小さな山である。同じマグマ溜まりからの異なる噴出口に形成された山と推定するのが自然だろうが確認はできない。山の大小や位置関係から推定して、南昌山の位置に大きな火山本体があり、薬師岳はその側火山という解釈も成り立つかもしれない。

拙稿「宮沢賢治作品における岩頸表象（二）―作品

「沼森」の地学的考察―」（文教大学文学部紀要35巻1号）で考察した、岩手山麓に見られる石ヶ森、沼森、大森などの石英安山岩、安山岩の貫入時期が、おおよそ二四〇万年〜三四〇万年前なので、ノロキ山、赤林山のマグマの貫入時期と重なる可能性は残されるにしても、東根山、南昌山、薬師岳などのような流紋岩系のマグマの貫入時期はそれらより古い時期として区別することができるだろう。

宮沢賢治が「岩頸列」とし記した山々は、これまで見てきたように、必ずしも同一期の、同一種のマグマが貫入してできた山々ではないが、新生代新第三紀中新世の凝灰岩層に新生代新第三紀鮮新世（二五八万年〜五三三万年前）のマグマが貫入した結果のものと判断される。ただ、東根山のマグマは一つ古い新生代新第三紀中新世（五三三万年〜二三〇三万年前）の末に当たることになる。

二一五 薄片の作成と偏光顕微鏡下での観察結果

これまでのデータで明らかにされたことは、宮沢賢治が「岩頸列」として記した山々は、新第三紀中新世

に堆積した凝灰岩層へ、新第三紀鮮新世にマグマが貫入した結果できたものであることだ。しかし、この段階ではまだ、その貫入岩を岩頸と呼んでよいのかを決めることができない。岩頸とは、火山の噴火活動が終了した後、マグマの通り道であった火道に残った溶岩が固まり、硬い芯が火山体の中に作られ、火山体の柔らかな部分が雨や水の流れて削り去られた結果地表に顔を出すようになった硬い芯を言う。岩頸に似た形の火山地形に貫入したマグマが地上に噴出し、それが冷却、固化した溶岩円頂丘（宮沢賢治の時代には岩鐘と言った）があり、岩頸と区別しなければならぬ。詩「雲の信号」には「岩頸だつて岩鐘だつて／みんな時間のないころのゆめをみてゐるのだ」とあり、宮沢賢治自身、岩頸と岩鐘を明確に区別していたことが分かる。

溶岩円頂丘の場合は地表に噴出したため急速に冷却し固結した火山岩であるのに対し、岩頸の場合は地中であつたこととある程度の太さがあることが多く、比較的ゆっくりと冷却し半深成岩である事が多い。

火山岩の場合地上に噴出したマグマが比較的早く冷却することにより、斑晶と石基がはっきりと区別され、

さらに石基部分は細粒の結晶やガラスから構成されることになる。冷却速度が非常に速い場合、結晶は形成されず石基部分は完全なガラス質となる。黒曜石がその例である。それに対し、深成岩は地下深くでゆっくりと冷却されるため、すべて粗粒の結晶の集合体となる。石基部分の形成されることはない。半深成岩場合、マグマの冷却速度は火山岩と深成岩との間にあるとされ、斑晶と石基が区別されるが、石基部分が微細な結晶からなり、ガラス部分を全く含んでいないという特徴が生じる。半深成岩の場合、岩石の種類としては斑岩、ヒン岩、ドレライトなどがあり、それぞれ珪長質岩（酸性岩）、中性岩（中性岩）、苦鉄質岩（塩基性岩）に対応している。

【A】赤林山（薄片・図A）

赤林山（855m）山頂に採取した試料は、斑晶鉱物として斜長石と単斜輝石が認められ、石基は斜長石等の細粒鉱物およびガラス部分から構成される。また、変質による緑泥石も確認できる。SiO₂含有率は62.15重量%であり、安山岩との境界に

近いデイサイトと判断した。火山岩である。

【B】箱ヶ森

箱ヶ森 (866m) 山頂で採取した試料は、斑晶鉱物として石英、斜長石、単斜輝石が認められ、石基は細粒の斜長石およびガラス部分から構成される。SiO₂含有率は62.81重量%であり、安山岩との境界付近のデイサイトと判断した。火山岩である。

【C】毒ヶ森

毒ヶ森 (782m) 山頂で採取した試料は、斑晶鉱物として斜長石、斜方輝石が認められ、石基は細粒の斜長石や輝石およびガラス部分から構成される。SiO₂含有率は63.58重量%であり、安山岩との境界付近のデイサイトと判断した。火山岩である。

【D】ノロキ山

ノロキ山 (742m) 山頂で採取した試料は、斑晶

鉱物として石英と斜長石が認められ、石基は細粒の輝石およびガラス部分からなる。斑晶としての輝石は少ないが石基には粒状の輝石が多く認められる。周縁部が溶融した大きな石英斑晶が多く認められるが、これは捕獲結晶と推定される。SiO₂含有率は63.15重量%であり、化学組成からは安山岩との境界付近のデイサイトであるが、多く存在する捕獲結晶である石英の影響でSiO₂含有率が高くなったものと考え、石英の捕獲結晶を含む安山岩と判断した。火山岩である。

【E】薬師岳

薬師岳 (771m) 山頂で採取した試料は、斑晶鉱物として斜長石と、周縁部が黒雲母に変質した少量の単斜輝石、斜方輝石からなり、捕獲結晶と推定される周縁部が溶融した大きな石英も認められる。石基は微小で等粒状の燐珪石、斜長石、黒雲母からなりガラス部分は認められない。また、1-3mmのドレライト捕獲岩も認められる。比重は2.56である。SiO₂含有率は70.29%であり、比

重と岩石組織から半深成岩である石英斑岩と判断した。

【F】南昌山

南昌山山頂付近は大きな岩石の露出が少なく、今回は新鮮な岩石を観察できた標高813m地点から岩石試料を採集した。

当試料の斑晶鉱物は斜長石および石英の大きな結晶であり、石基は微小で等粒状の燐珪石からなり、ガラス部分は認められない。また、有色鉱物の変質によると思われる緑泥石が全体にみられる。比重は2.47である。SiO₂含有率は72.29%であり岩石組織から半深成岩である石英斑岩と判断した。

【G】東根山

東根山(928m)山頂で採取した試料は、斑晶鉱物として石英、斜長石、単斜輝石が認められ、石基は珪長岩質組織を示す細粒鉱物集合体からなり、ガラス部分は認められない。SiO₂含有率は69.29重量%と火山岩では流紋岩との境界付近の

デイサイト領域であるが、岩石組織から半深成岩である石英斑岩と判断した。

二一六 岩頸といえるか

岩石の種類は、マグマの種類と冷却速度との二つの要素から定まるが、冷却はマグマが地層接触面とどのような位置関係にあるかで速度が異なるため、岩種が決定されたからといって、岩頸であるかどうかを決めることはできない。野外調査を行い、貫入される岩体と貫入するマグマとの関係を確認し、薄片の観察結果と照らし合わせ、総合的に判断されることになる。

本論では、第一に、貫入マグマが地上で噴出したものか、脈岩として地中で固化したものかを判断するため、被貫入層である新第三紀中新生の男助部層と湯口層が、岩体とどのような関係にあるのかを実地調査の結果を示し、第二として、各岩体(山頂部分)からサンプルを採取し、(有)考古石材研究所に薄片の作成と偏光顕微鏡下での観察を依頼し、岩種の決定を行った。その二つの要素から、宮沢賢治が「岩頸列」で記した山々を岩頸と呼んでよいかどうかを判断でき

るのではないかと考える。

まずは、被貫入層の男助部層について確認しておきたい。すでに紹介した、大上和良・松坂裕之・土井宣夫・越谷 信・大口健志「脊梁山地東縁部、盛岡－花巻市西方に分布する中新統の層序について」によれば、男助部層の模式地は、「岩手郡雫石町男助周辺で、層の厚さは、北部の模式地付近で400m、南部の花巻市志戸平で700m以上」、分布は「北部の雫石川流域と、南部の豊沢川流域に分かれ」。「北部では模式地のほか、繋、猪去沢、南昌山の山麓部、丹沢山などに、南部では調査地域南東縁にあたる花巻温泉西方にも分布」、岩相として「猪去沢層のほぼ中に挟まれる本部層は猪去沢層と同じ鉱物組合せをもつ塊状のデイサイト質の軽石凝灰角礫岩からなる」とされる。また、花巻地区の志戸平温泉北方大沢付近では男助部層の最上部に層厚約15mの輝石安山岩の溶岩および同質火山角礫岩が介在し、「この安山岩の新鮮な部分をテレダイオン・アイソトープ社に依頼」、「全岩試料のK-Ar法による放射年代として $11.1 \pm 2.2\text{Ma}$ が得られ」とあり、男助部層が、少なくとも千百万年以前に形成されたも

のであることが示されている。

宮沢賢治が「岩頸列」の山々と記した地域は、新第三紀中新世のころは海底であり、そこにデイサイト質の軽石凝灰角礫岩が火砕流として流れ込み、堆積したものであることが理解されるだろう。そのように形成された男助部層に鮮新世のころマガマが貫入したということになる。当然、男助部層の下部層である飯岡層をも突き抜けているのだが、ここで重要なことは、そのマガマが男助部層を突き抜けていないこと、すなわち山塊がその上部をかつて男助部層に覆われていたことを確認することである。

箱ヶ森や赤林山は、現在においてもいまだ山頂付近八〜九合目（およそ800m）くらいまで男助部層に覆われていることが確認できる。したがって、現在の山容は、ほぼ男助部層内で固まったものと判断できるだろう。それに対し、それほど距離の離れていない毒ヶ森は、標高が箱ヶ森や赤林山よりも低いにも関わらず、登山口（650m）付近からすでに男助部層はすべて浸食されており、残されていない。毒ヶ森や南昌山はお椀を伏せたような特徴的な形状をしており、仙台の太白

山と共通した姿を持つ。

南昌山は500m付近から男助部層が消失する。五合目登山口に至るまでのなだらかな登山道を歩く過程で、350m付近に男助部層(図11)の下部層にあたる飯岡層(図12)が確認できる。380m付近から男助部層に変化し、500m付近で男助部層が消失することを踏まえると、ここでの男助部層の厚さは120m程度で、大上和良らが400m～700mの厚さがあると記していることから算出すると、少なくとも300m～500mほどの厚さの男助部層がすでに浸食されていることが分かる。500m付近から登山道が急激に勾配を増し、火山岩体を登ることになる。頂上までの残りの高さは350m。したがって、おおよそ山頂付近まで男助部層に覆われていたと推定できるだろう。男助部層の上位には整合で重なる矢櫃(湯口)層(約200m)が存在していたはずだが、すべて浸食され、南昌山付近には存在しない。

男助部層を南昌山の岩体と思われる火山岩を、中腹から山頂付近まで標高の異なる三種のサンプルを採取し、薄片作成と鏡下観察を依頼した。その結果、三種

とも同種類の岩石(石英斑岩)であることが確認された。

薬師岳は600m付近から男助部層が消失し、山頂まで南昌山と同様の火山岩が分布している。薬師岳は急斜面のため岩石の露出部分が多い。柱状に節理した岩石表面には数センチ大の捕獲岩(ゼノリス)が多数観察される。東根山は山頂部付近(おおよそ800m)まで男助部層が残っており、火山岩の露出は少ない。

(有)考古石材研究所の柴田徹氏によれば、「いずれの山の溶岩も、溶岩円頂丘を形成する事の多い溶岩で、四〇〇万年～五〇〇万年という時間を考えると、噴火により形成された火山体そのものがそのままの形で現在まで残ることは難しく、火道部分が現在現れていると考える方が合理的だと思う」とのことである。

今回調査した南昌山山塊の七山は、標高がすべて千メートル以下であり、山頂には木や草が生えており、男助部層と火山岩体との境を明確にすることに不確かさが伴わざるを得ない。その中にある、毒ヶ森、薬師岳、南昌山は火山岩がはっきりと露出しており、他の山と異なっている。形状からすれば、仙台の太白

山に似て、いかにも岩頸といった風貌である。

大石雅之(前出)が言うように、南昌山山塊七山は、岩頸といって問題はないと思われる。本論は大石の判断に、全岩化学組成分析や絶対年代測定などのデータを加えることで、より詳細な検討ができたと言えるだろう。岩石組織としての火山岩か半深成岩かの違いは、火道のどの部分が残っているのかで異なってくるため、半深成岩を岩頸、火山岩を地上噴出と決めることはできない。

宮沢賢治の用いた「岩頸列」は、地質学者・宮沢賢治の独自の発見であった。その事実は、地質学的に興味深いことであるに違いないが、宮沢賢治の文学を考えるうえでも有益なデータをもたらすことになる。宮沢賢治作品における岩頸表象は、必ずしも地質学的な条件を満たしていないと考えられる場合も含まれており、その差異を見極めたうえでなければ、作品における岩頸表象の意味を正確に分析できないと言えるからである。

文語詩「岩頸列」は、最晩年に纏められた『文語詩稿一百篇』に収められているものだが、南昌山や毒ヶ

森のモチーフは初期の「短歌」にも見出せるもので、宮沢賢治の文学的営為を貫くものの一つとして捉えることが可能である。

三 解離性意識変容体験

三―一 南昌山・毒ヶ森

宮沢賢治の文学的営為は短歌という形式をとり、「(明治四十二年四月より)」から始まる。それは宮沢賢治が盛岡中学に入学した年のことである。南昌山、毒ヶ森を題材とした歌は、「大正四年四月」の歌稿の中に見いだされる。大正四年四月は盛岡高等農林学校に入学した時である。

毒ヶ森

南昌山の一つらは

ふとおどりたちて

わがぬかに来る

宮沢賢治にとって、毒ヶ森や南昌山どのような山であったのか。花巻駅から盛岡駅に向かう車窓の左手(西

側)に南昌山の姿がはっきりと見えるので、盛岡中学に入学した賢治は繰り返し見ていたことになるが、盛岡中学の同級生藤原健次郎の実家が紫波郡矢巾にあり、藤原健次郎との関りが、南昌山そして毒ヶ森との出会いを導いたと言えそうである。

盛中 二年一学キ 「藤原健次郎 南昌山 家」

「全 水晶」「全 頂上」

の記述が、「『東京』ノート」に確認できる。この記述は賢治が後年、盛岡中学時代から盛岡高等農林時代を振り返ったのメモと見られることから、盛岡中学の二年一学期に、藤原健次郎の家に行き、二人で南昌山に登り、水晶を採取したことがあったのだと推定される。南昌山は藤原健次郎の家からは西方数キロの距離にあり、毒ヶ森は南昌山の右奥にあたる。その山容を眼下で確認することができるが、もし見る位置が南にずれた場合は南昌山に隠され、北にずれた場合は赤林山に隠され、毒ヶ森は見えなくなってしまう。つまり、短歌に詠まれたように毒ヶ森と南昌山をセットにして捉え

るためには、矢巾という藤原健次郎の家との位置関係が大きなポイントになる。

宮沢賢治は南昌山のどこで水晶を採取したのかという点も興味深い。本論との直接には関わらないので省略する。興味のある方は、拙稿「宮沢賢治は、なぜ「南昌山」で水晶を採取できたのか」(『文教大学国文』第48号、2019・3)を参照いただきたい。

宮沢賢治が南昌山、毒ヶ森の短歌を作成した時期は、歌稿に記されている「大正四年四月」と見るべきだろうが、南昌山、毒ヶ森との出会いは盛岡中学時代に遡ると考えておく必要がある。そして、岩頸との関わりだが、盛岡高等農林に入学したばかりの賢治が、南昌山や毒ヶ森を地質学的名称である岩頸と認識していたかどうかは不明である。岩頸の語が短歌に用いられた例は、約一年後の大正五年七月の「石ヶ森」の歌まで待たねばならない。石ヶ森や沼森を歌った短歌は、盛岡高等農林の二年の夏休みに実施した「盛岡附近地質調査」が背景にあり、その時までには賢治は地質調査ができるだけの地質学的知識を身につけていたと考ええてよいだろう。逆にいえば、南昌山や毒ヶ森が岩頸で

あることを、盛岡中学時代や、盛岡高等農林の四月の段階では認識していなかったと考える方が自然である。したがって岩頸という認識はいわば後付けのもので、最初にあったのは「大正四年四月」に記された南昌山、毒ヶ森での体験ということになる。その体験を私は前著（第七章「岩頸」意識について）で、「毒ヶ森、南昌山という実在の山名が使用されたこと背景には、おそらく地学的意味がある。毒ヶ森も南昌山も賢治が「岩頸」と捉えていた山だということだ」と指摘したが、多少の訂正を感じている。賢治の文学的営為を俯瞰的に説明しようとした場合、岩頸という指標はきわめて有効であり、その点の変更を認めてはいないが、大正四年四月の短歌を分析する上で、毒ヶ森、南昌山が必ずしも岩頸であることを賢治は知っている必要はないことになるのである。

前著においてもそのような前提で論を展開してはいるのだが、明確な区切りができておらず、曖昧さが残ってしまっている。あらためてここで確認するなら、宮沢賢治は盛岡中学時代か盛岡高等農林に入学した初めのころに、毒ヶ森、南昌山が急に踊り立ち上がるよ

うに、自分の方に迫ってくるという体験をした。その体験を書き留めたものが大正四年四月の短歌なのである。「一つら」の解釈だが、この点もここであらためて私見を述べておきたい。「一つら」とは一連または一列という意味で、文語詩「岩頸列」の「列」の表現に引き継がれているのではないだろうか。「ぬか（額）の表現も特徴的である。「わがぬかに来る」は賢治の体験が、毒ヶ森、南昌山が自分の身体に飛び込んで来るような質のものであったことを示している。

三―二 不思議の国のアリス症候群

前著において私は、宮沢賢治が体験した知覚の異常を、精神科医・福島章が『不思議の国の宮沢賢治―天才の見た世界―』（日本教文社、1966・9）で示した「不思議の国のアリス症候群」^(注)に当てはまるのではないかという見解を提示した。ただ、自分の中で納得しきれない点がないわけではなかった。「不思議の国のアリス症候群」は症候群の名が示すように、あくまで共通する病態のことであり、そのような病態を示すにいたる元となる病気は種々あるはずで、隔靴搔痒の感

を抱いていた。また、宮沢賢治の作品中に見られる、知覚異常に基づくと推定される不可思議な表現は、「不思議の国のアリス症候群」として説明がつけやすい小視や大視に限られるわけでなく、そのほか幻視、幻聴、幻臭、共感覚、離人症、体外離脱、被注察感、入眠時幻覚などさまざまな知覚変容が想定され、宮沢賢治の文学全体を考える上で「不思議の国のアリス症候群」という視点は、その一部を説明しうるだけで、統一的に説明できない憾みがある。

前著を書き終えた段階で、私の岩頸表象に関する解釈は手詰まりになっていたと言つてよいだろう。私はここで、「解離」という新たな視点を提示しようとしているのだが、もとより私には、精神医学の分野を語る資格があるわけではない。解離を専門とする精神科医二人が宮沢賢治の作品との関りで解離の視点から述べているので、紹介したい。

まずは、柴山雅俊『解離性障害―うしろに誰かいる』の「精神病理―」（ちくま新書、2007・9）である。柴山は、第七章「解離とこころ―宮沢賢治と体験世界」で、宮沢賢治の作品世界と解離との親和性を指摘している。

私が専門としている精神医学とは病の学問であり、それを作家にそのままあてはめて論じることができない。賢治の生育歴を調べても、彼がなんらかの病気であったと判断する根拠はない。しかし、私には作品のところどころに解離の主観的体験と類似したものが見出されるように思われえない。彼の心的世界は明らかにわれわれの体験世界と異なっているとある。それを単に精神病や神秘体験として理解するのではなく、解離、とりわけ意識変容の観点から了解の幅を広げようと試みようとするのが本章である。

また、精神科医・浜垣誠司は「宮沢賢治の作品に現れる超常体験の精神医学的検討―「解離」としての理解―」（『宮沢賢治研究 Annual Vol.29』2019・3）で、これまで提示されてきた賢治の体験に関する様々な精神医学的解釈を確認した上で、どの解釈も特別な有用性はないとの判断を示し、「筆者も、これまで解離性障害やその関連疾患を診察してきた経験から、賢治が

作品に描いている不思議な体験は、解離性障害の患者の陳述の特徴に見事に合致すると常々感じており、この柴山説に深く賛同するものである」と述べている。柴山や浜垣のいう「解離」とは、「表象幻視、離人症、体外離脱体験、気配過敏症状、被注察感、幻視等の解離症状」を指している。賢治の場合「病的状態にあつたとは言えない」という見解も、柴山と浜垣とは一致している。

三―三 宮沢賢治の知覚変容体験

宮沢賢治の感性はきわめて独特なもので、賢治の友人や教え子たちは、興味深い聞き書きを残している。関登久也著『宮沢賢治物語』（岩手日報社 1967）に次のような記述がある。

宮野目のあたりからそろそろ日も暮れかけて、ほの広くはるかに続く国道を、足早の先生について行くと、次第にあたりの闇が濃くなり、黄色い月が東の山の上にはんやりあらわれました。（略―）

月が出たり、風が音をたてたりするもので先生はなんともいえないような喜びを感じたらしく、ゴム靴を踏み鳴らしてはしきりに、ホオホオホオと叫びながら先頭をきります。

その時の先生の様子は、全く歓喜雀躍という言葉があてはまるほどで、風景の中に全身がひたひたきつているようにさえ見えました。疲れてくると道はたの枯草の上に、四人は並んで腰を下ろして休憩しました。その時が先生の創作される時で、例の手帳を出されては夢中で詩を書かれ、あるいは童話を草稿されるのでした。

「月夜の遠足・・・菊井清人氏から聞いた話」

宮沢賢治の創作は、このようにしてなされていったということである。手帳に書かれたものがその後ノートに書き写され、さらには原稿用紙に書き写されていったのである。

この聞き書きは舞踏のようでポジティブなものだが、気味が悪くネガティブなものもある。

先生は、夜、家を出て盛岡まで歩行し、一睡もせず翌朝一番の汽車で帰って、授業することがありました。何故そんな無理をするのか、私達には不可解でしたが、しばしばそういうことをなさいました。これも土曜日だったと思いますが、寄宿舎の生徒が六、七人、先生につれられて志度平温泉に行つたことがあります。

二堰あたりか、あるいはその先だったか、なんでも細い流れの音を聞いていると、だんだん眠けがさしてきました。すると先生が、「今ね、そのところを、頭の大きい足のない坊主が通つて行つたよ。」とおっしゃるので、私たちの目がさめました。これは私達に元氣をつけるための先生の計らいではなく、確かに先生はそういう怪しいものの姿を見たようでした。

「志度平行き・・・菊井清人氏から聞いた話」

宮沢賢治の毒ヶ森、南昌山の体験に関連させて考えると興味深い聞き書きとしては、次のようなものがある。

花巻農学校の裏手に、五本の古い杉の木がありました。その木の下で、ある夕方、先生は大入道を見たと言うのです。それを見てから、全身の毛穴がふさが、ぶつぶつしたものが皮膚に出たということでした。また、その大入道を見てから先生が寝ついてしまったとも書いてあります。

「大入道・・・沢里武治氏から聞いた話」

「大入道」は昔から伝わる「妖怪」の一種で、僧形をとることの多い巨人である。実体の不明瞭な影のよくな場合もあるようである。大きさも人間を少し大きくしたものから、山のように巨大なものもあるらしい。頸が伸び「ろくろ頸」のような姿もある。賢治が見た「大入道」がどのようなタイプのものか分からないが、五本の杉の木の下の方に「大入道」のような巨大な何かを見た、また、見たと感じたことは確かであろう。ただ、杉の木の下に初めから巨大なものが存在していたとは考えにくい。たぶん、何かが賢治に向かって巨大化して接近してくるかのような体験だったのかと思われる。

三十四 宮沢賢治の知覚変容体験に関する精神医学的

検討

浜垣誠司は「宮沢賢治の作品に現れる超常体験の精神医学的検討―「解離」としての理解―」（前出）の「四、賢治作品に現れる解離現象」、「（4）近接化」で次のように述べている。

鈴木健司は、岩頸を描いた賢治の作品に繰り返し現れる、こういった独特の体験に注目し、これを「岩頸」意識」と名づけて詳しく考察を行っている。鈴木は、作品中の岩頸が「伸びる」という性質を持っていることから、福島が挙げた「不思議の国のアリス症候群」を紹介しつつ、この症候群に含まれる「大視」との関連を示唆している。一方、三節（2）で述べたように、「不思議の国のアリス症候群」に属する種々の症状は、解離現象としても理解できるものである。筆者としては、賢治のこの「岩頸がこちらに迫ってくる」という体験は、柴山が解離性意識変容の際の現象として記載している「近接化」に該当すると考える。

浜垣が解離の症例として引用しているのは、柴山雅俊『解離の構造―私の変容と〈むすび〉の治療論』（岩崎学術出版社、2010・10）である。第1部「解離の症例」第2章「意識変容を呈した解離性障害の一症例―解離性意識変容の主観的体験構造について―」に、「遠隔化」と「近接化」についての記述がある。

遠隔化では離人症に類似した症状が多彩にみられた。知覚で特徴的なのは「親と食事をしていたら親が急に遠のいていく」、「皆と話していても、ひとりでに皆が遠ざかる」、「物が遠のいていく」などの「遠ざかり」の訴えである。ものが実際よりも遠くに見える遠隔視（teleopsis）や小さく見える小視症（micropsia）などは遠隔化に含まれる。壁が遠ざかって部屋が大きくなったと感じることもあり、その際には同時に自分の身体が小さくなるといった感覚を伴いやすい。

近接化は普段注意をあまり向けることのない意

識の周辺に位置している外界の知覚、表象（記憶表象を含む）、体感などが過剰なイメージや実感を伴って主体に迫ってくる体験である。対象性をもつものがすべて自分を圧倒するものとして迫ってくるため、不安、恐怖、緊張、困惑を強く感じる。周囲の物が自分に向かって圧迫してくるとか、壁が自分に迫って来て部屋が小さくなったと感じることもある。また物が大きく見える大視症 (macropsia)、物が近くに見える近接視 (pelopsia)、床や壁が盛り上がったりするなど物体が歪んだり、変形して見える変形視 (metamorphopsia) もある。

浜垣は、柴山のこのような解離障害に伴う「遠隔化」「近接化」の概念を念頭に、「不思議の国のアリス症候群」も、解離症状の一種である「近接化」や「遠隔化」から理解が可能だと述べているのである。

四 短歌No.240と文語詩「岩頸列」の関係

南昌山、毒ヶ森を読んだ短歌No.240と文語詩「岩頸列」

は、すでに指摘したように宮沢賢治の文学的営為の最初期と最晩年というように離れて存在する。そこからどのようなことが見えてくるのか、考えてみたい。

まず想定しておきたいことは、盛岡中学か盛岡高等農林一年の時に、南昌山、毒ヶ森が急に伸びて自分に迫ってくるような、不安、恐怖を伴う体験を賢治がしたのではないかということである。短歌においてはその体験が比較的直截に表現されたように思われる。賢治の短歌は体験の記録のような側面があり、体験そのものが特異な場合、詠まれた短歌もまた特異な内容となる。賢治の短歌には短歌一般の持つ抒情、詠嘆の要素が少ないといわれるが、体験そのものの記録が主となっていると考えると、その理由が納得しやすい。

賢治の短歌の持つ記録性は、心象スケッチという詩法に引き継がれ、口語自由詩の成立を促した。賢治の口語自由詩は時として奔放で想像力豊かなファンタジー系列の詩を生み出したが、賢治のファンタジー能力は童話という形式を生み出すことにもなった。

そして、文語詩である。賢治は「文語詩稿一百篇」「文語詩稿五十篇」を残したが、どのような意図をもって

文語詩を作成したのか。岩頸表象自体は口語自由詩にも童話にも指摘できるもので、それぞれ独特の味わいを持つが、南昌山、毒ヶ森という素材だけに注目するならば、短歌No.240は、口語自由詩と童話という表現形式の底を伏流水のように流れ続けたということになるだろう。文語詩は、体験の最終的な再構築・再構成の場というのが私の解釈である。特に強調しておきたいのが視点の問題である。賢治の視点は自我に固着しないという特徴があり、それは表現形式を問わず指摘できることだが、短歌No.240の場合視点は書き手自身にあるのに対し、文語詩「岩頸列」は複数の視点が存在するという違いがある。

すでに記したが、南昌山と毒ヶ森が同時に視野に入る場所は矢巾付近のみである。むしろ「寄り」で見ると「引き」で見ると違って違いは生じるが、ここで言いたいことは、南昌山と毒ヶ森とを同時に見る場所が、確かに地理上存在するという事実である。それに対し、確かに文語詩「岩頸列」に記されたような、箱ヶ森、毒ヶ森、南昌山、東根山を同時に見ることのできる場所は、地理上存在しないように思うのである。矢巾町の東方、

盛岡市乙部あたりから、かなり「引き」で見れば可能なようだが、岩頸列は書き手の近くに存在しているはずで、詩「岩頸列」は一視点、固定された視点から書かれたものでないと判断すべきである。作品上、書き手の眼前に岩頸は列をなして存在しているのである。したがって視点は複数あるとなる。

賢治が文語詩「月の鉛の雲さびに」下書稿（四）（一六）の余白に記した岩頸列の線画（図13）を見ても、もしそれが箱ヶ森、毒ヶ森、椀コ、南昌山、東根山を描いたものとするとすれば、写真のような地理的正確性をもったものとみなすことはできず、信時哲郎が『宮沢賢治「文語詩稿一百篇」評釈』（和泉書院、2019・2）で述べているように、「あくまで記憶の中のものであって」、「どの地点から見るときにどう見えるかについてまで、写真のように正確に把握しきれなかったわけではな」ということにならざるを得ない。箱ヶ森が強調されていることからすれば視点は盛岡側であり、毒ヶ森が強調されるとすれば視点は矢巾側にあるはずで、東根山（山頂部がこたつ型）が強調されているとすれば、その視点は花巻側にあるということ

になる。賢治のこの線画では遠近法が成り立っておらず、例えばキュビズムのような複数視点を設定しなければ、理解できないことになる。

ではなぜ、文語詩「岩頸列」は複数視点となっていないか。おそらくそれは、文語詩「岩頸列」のもつ構造的にも関係している。

前著において私は「文語詩「岩頸列」の第一連・第三連は〈現実〉としての「岩頸」であり、第二連は〈心象〉としての「岩頸」といえるのではないだろうか。賢治の〈心象〉体験が「芝雀」を通じ再現されているとの判断である」と記した。この判断は今でも変わらない。文語詩「岩頸列」は、心象スケッチという詩法から逸脱したものである。もし「それぞれの心もちをそのとほり記録した」(岩波茂雄宛書簡²⁵)したもの的心象スケッチであるとするなら、そこから逸脱し、視点を複数化させた手法は、賢治が文語詩という形式に託した何かであるといえるのではないだろうか。心象スケッチにもすでに〈声の多重性〉という通常の一人称視点では発想し難い表現方法を実現させているが、それはここでいう視点の複数化と同じではない。

私はここで文語詩全般のもつ特質として語るつもりではないが、文語詩「岩頸列」は明らかに、短歌、口語自由詩、童話という表現方法と異なる、新たな試みであったといえるように思うのである。複数視点の問題は、「芝雀」の解釈にも関わってくる。芝雀は第三連に、すなわち賢治の心象が仮託された部分に現れる。芝雀の名は四代目中村芝雀(三代目中村雀右衛門)を連想させるだろう。屋号は京屋で、明治、大正と上方で活躍した女形の歌舞伎役者である。文語詩稿中の「みやこ」を京都のことと考えると、芝雀は歌舞伎役者の中村芝雀と矛盾なくつながってくる。四代目中村芝雀は、大正三年十月に三代目中村雀右衛門を襲名しており、文語詩稿が成立した昭和八年当時には、すでに病没(昭和二年十一月)しており、「芝雀」の設定自体フィクションであることが判明するが、文語詩「岩頸列」で歌舞伎役者「芝雀」の名が用いられた理由に手がかりがないわけではない。

細田嘉吉は『石で読み解く宮沢賢治』(蒼丘書林、2008・5)で、「小屋掛け」の小屋を盛岡劇場と解釈している。地元の人である細田にとっては、ごく自然に

「芝居小屋即ち盛岡劇場」となるようで、盛岡劇場の近く岩手公園から南西に向けて撮影した岩頸列を提示している。その写真には、箱ヶ森、赤林山、南昌山、東根山の山容が確認されるが、毒ヶ森は、赤林山に隠れてしまい見ることができない。毒ヶ森が見えないとなると、文語詩「岩頸列」と一致しないこととなる。ただ逆に、この角度からでなければ箱ヶ森が見えなくなってしまうことにも注意を払う必要がある。盛岡以南の矢巾や花巻の方角からは、箱ヶ森は赤林山に隠れて見えなくなってしまうのである。

念のため、盛岡劇場に公演記録を調べていただき、そこに中村芝雀の名があるかどうか確認したが、見当たらないということであった。

文語詩「岩頸列」には、二つのフィクション性が確認できるようだ。一つ目が、岩頸列はどの角度から見たとしても、そのすべての山を一望できる場所はないということ。賢治の書き残した岩頸列の線描きメモは、あくまで賢治の頭の中にある岩頸列で、それは、盛岡、矢巾、花巻という三つの視点から見たそれぞれの山を、キュビズムのような複数視点の手法で再構成したもの

と考えられること。二つ目が、芝雀に関わる挿話で、芝雀の名は四代目中村芝雀から想を得たものと推定されるが、岩頸列の近くに小屋掛けした田舎芝居の旅役者という設定を新たに創作し、芝雀に「山によきによきと、立ちし」という体験をさせたということである。

このフィクション性は、文語詩「岩頸列」という作品そのものの成り立たせる基本的性質としてのフィクション性というべきもので、短歌No.240が再構成され、宮沢賢治の個私の体験を離れた、より普遍的な体験として文語詩という形式をもって描き出されたと見られるだろう。

短歌No.240に書き留められた毒ヶ森、南昌山での体験は、後に岩頸という地質学的な捉え直しという作業を経て、口語自由詩、童話という表現形式の底を流れ続け、文語詩「岩頸列」においてその体験が再構成され、それまでの心象スケッチという手法と異なる手法の元に成立したとまとめられるのではないだろうか。

口語自由詩、童話という表現形式に書き留められた岩頸表象は、稿を改めて論ずる予定である。

【注】

(注1) 「腕コ」のモデルに関し、原子朗編『宮沢賢治語彙辞典』(1989.10)では、大石山の通称と説明されている。それに対し、細田嘉吉は『石で読み解く宮沢賢治』(蒼丘書林、2008.5)で、「木津ヶ森」説を、さらに、大石雅之が「宮沢賢治の『岩頸列』のある山地に関する一考察」(『岩手の地学』第39号、2009.6)で、赤林山説を提出している。

(注2) 「岩手の地学」第39号(岩手地学教育研究会、2009.6)

(注3) 薬師岳は、地元での通称で頂上には薬師岳と書かれたプレートがある。しかし、国土地理院の五万分の1の地形図にその名が記されていないことから、「岩手の地学」(岩手県地学教育研究会)に掲載された拙文では「771mピーク」と記述した。

(注4) 宮城一男『農民の地学者 宮沢賢治』(築地書館、1975.1)、亀井茂・照井一明著『宮澤賢治 岩手山麓を行くー盛岡附近地質調査』(イーハトーヴ団栗企画団、2012.4)。

(注5) 一九五五年にイギリスの精神科医トッド(英語: John Todd)が名づけたもの。知覚された外界のもの大きさや自分の体の大きさが通常とは異なつて感じられることを主症状とし、外界が小さく感じられる小視症、大きく感じられる大視症、ひずんで感じられるものを変視症などがある。



図1 南昌山山塊

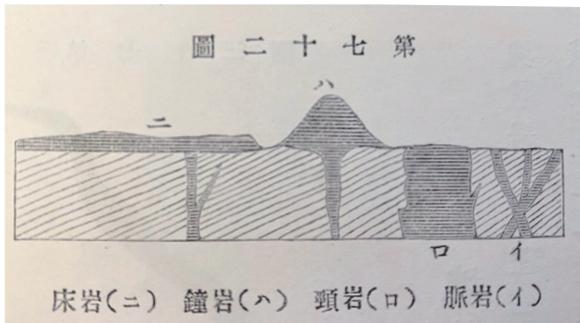


図2

宮沢賢治作品における岩類表象（二）

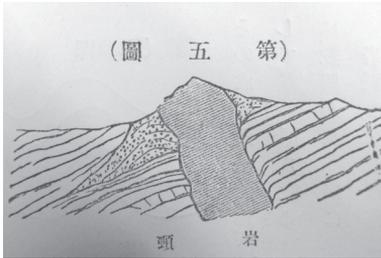


図3 岩類

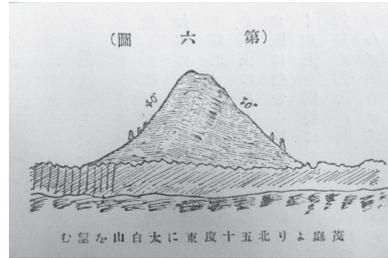


図4 太白山



図6 南昌山



図5 太白山



図8 太白山登山道



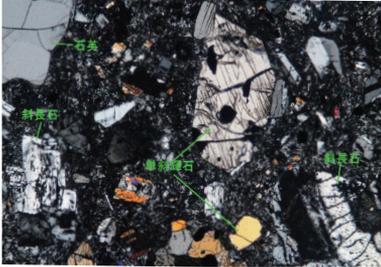
図7 太白山 直交ニコル (40倍)



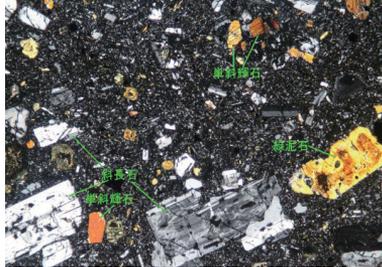
図10 毒ヶ森の方形に割れた岩石



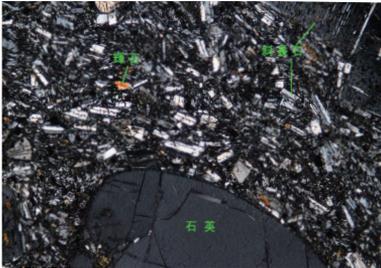
図9 毒ヶ森の山容



【B】箱ヶ森 (薄片; 直交ニコル 40 倍)



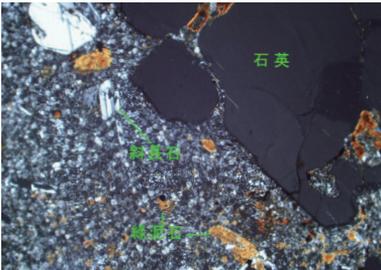
【A】赤林山 (薄片; 直交ニコル 40 倍)



【D】ノロキ山 (薄片; 直交ニコル 40 倍)



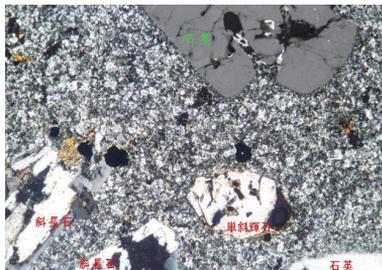
【C】毒ヶ森 (薄片; 直交ニコル 40 倍)



【F】南昌山 (薄片; 直交ニコル 40 倍)



【E】薬師岳 (薄片; 直交ニコル 40 倍)



【G】東根山 (薄片; 直交ニコル 40 倍)

宮沢賢治作品における岩類表象（二）

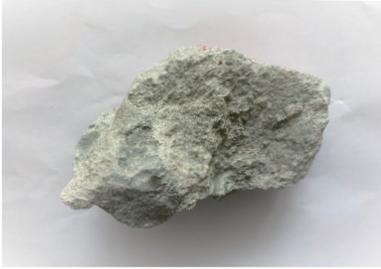


図 12 飯岡層



図 11 男助部層

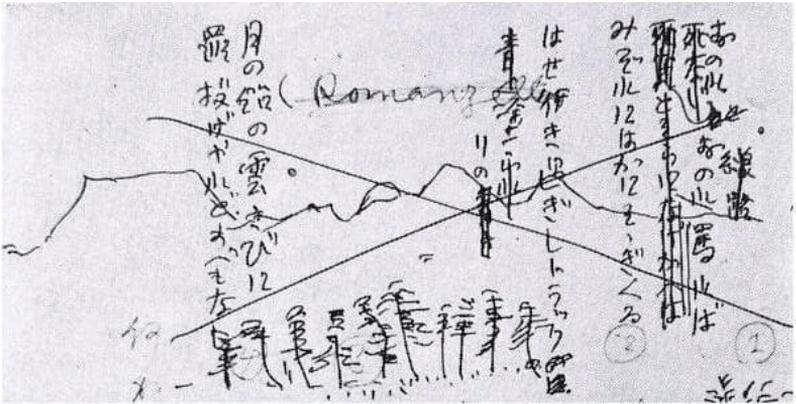


図 13 文語詩「[月の鉛の雲さびに]」下書稿（四）～（六）